

山形県高体連サッカー部から派遣され、第 89 回高校サッカー選手権を視察する機会を得た。毎年自主的に視察しているが、「公務」としてサッカー場に赴きメモを取りながら試合を観戦するのはやはり身が引き締まる思いであった。

まず視察した試合は以下の 7 試合（勝ちチームが左）。

12 月 30 日開幕戦	駒澤大高校（東京 B）	VS	大津（熊本）
12 月 31 日一回戦	前橋育英（群馬）	VS	神村学園高等部（鹿児島）
	室蘭大谷（北海道）	VS	四日市中央工業（三重）
1 月 2 日二回戦	関西大学第一（大阪）	VS	羽黒（山形）
	作陽（岡山）	VS	佐野日大（栃木）
1 月 3 日三回戦	西武台（埼玉）	VS	作陽（岡山）
	関西大学第一（大阪）	VS	尚志（福島）

さて、一試合一試合のコメントはここで措き、羽黒戦以外の 6 試合をトータルに見てみると、組織力が個の奔放さを凌駕した戦いであったと言える。敗れた 6 チームいずれも、巧い選手がいてボールポゼッションでは上回り、最初の 5 分で勝利を予想したくなるチームであった（では神村学園がボールポゼッションで上回ったとはいえないが、見栄えのするスキルにあふれていたのは神村学園であった）。しかし、組織的な守備で相手の攻撃を封じ込め、そして組織的なカウンターで素早くネットを揺らす勝利者のしたたかさに、結局は涙をのむこととなった。ポゼッションサッカーを標榜するチームの試合をすべて見たわけではなく、たまたま私が見た試合がそうなのであるから、「今大会はカウンターサッカーが勝利した大会だ」などと軽々に評価を下すことはできないが、興味深い符号の一致に思えた。ポゼッションサッカーとカウンターサッカーというレッテルを敗者と勝者に貼るのがあまりにも大雑把なまとめで暴挙であるとしても、少なくとも言えるのは各チームが自分たちのやりたい多様なサッカーをしていた、自己主張のあるサッカーをしていたということである。

これは当たり前と言えればあまりにも当たり前であるが、私にはとても興味深く、そして勇気づけられるものであった。近年、日本サッカー協会は「人もボールも動くサッカー」を標榜し、スペイン＝バルサのサッカーを日本の理想とし、他のサッカーを「（体の小さな）日本人が目指せない」とみなしている節があるが、日本の全チームが日本サッカー協会の方針に従うこと（みんなが同じサッカーを目指すこと）はとても不健全であり、そして結局日本全体の強化にもつながらないと私は常々感じていただけに、全国大会という場で多様なサッカーが繰り広げられる現実は、とても痛快であった。ある指導者講習会で 3 種や 4 種を指導している複数の指導者が「南アフリカ W-Cup の日本代表の戦いは、日本のこれまで掲げてきた戦い方と違っており、子供たちに悪影響を与える」と真顔で主張する場に出くわしたことがあるが、そもそも日本代表の戦いを自チームに直結させる発想自体が、（結局は）一つのサッカーに収斂させようとする日本サッカー協会的な誤った発想だと感じている。

話を元に戻そう。6 試合の勝者はいずれも組織的なディフェンスから素早いカウンターを仕掛けるチームであった（前橋育英などにも少なくとも言えるのは、カウンターからの得点によって勝利していたということ）そして敗者は個々のスキル、ボールポゼッションでは勝りながらも一発の勝負に敗れたということを上記したが、山形と違いさすがに全国レベルの戦いと思わせた点について、二点述べたい。

一つは、ポゼッションサッカーといっても、選手全員が厳しい球際、激しいディフェンス（チェイシング）を実行していたということ。往々にして山形や東北のレベルでは、ポゼッションやパスサッカーを口にするチームは緩いパスを回したり、パスをした後のムーブを惜しんだり、ちんたら守備をしたり（守備しなかったり）といった、山形弁で言うところのアガスケの多いサッカーを想像しがちであるが、パスサッカーの名家と見なされているバルサの各選手がボールを奪われた瞬間猛然とボール保持者を追い込んでいくように、選手権におけるポゼッション型のチームの各選手は攻守にわたりきびきびとしたハードワークを実行できていた。

また第二に、カウンターサッカーといえども、速い弾道のボールを左右に散らしたり、トップの選手の足元（胸元、頭）にしっかり楔を打ち込んだり、DF と GK の間にピタリと落ちるボールを供給していたということ。往々にして山形や東北のレベルでは、（自分たちでそう自己定義するチームは少ないだろうが）カウンターサッカーを標榜するチームは、意味の分からない放り込みをフィジカルで無理やり何とかする、それゆえ薄い攻め（可能性の低い攻め）に終始する、というような印象がある。しかし選手権の出場チームは、ロングキックの確かな精度に基づいて、縦に早い攻撃を可能性のある攻撃につなげていた。ほとんどの選手がしっかりボールを蹴る（一発でサイドチェンジできる）技術があるという事実は、全国大会というステージを考えれば驚くに当たらないのであろうが、日々山形で見ている現実とのギャップはあまりに大きく驚くばかりであった。そして、この正確なロングキックによる攻撃は、ポゼッション型のチームにも当然当てはまるものであった。たとえば高速ドリブルが特徴的な尚志 はボールサイドに敵が寄ってきたと判断すると正確なロングパス一発で局面を打開していたが、ポゼッションサッカーを可能にする意味でもロングキックがいかに重要か、ということを感じさせられる選手であった。そしてこの点は、羽黒高校の反省点（私にそう見えた反省点）に関係している。

羽黒高校は攻撃の第一ステップとしてまずは二人の FW を走らせるか足元にパスするかで起点を作り、速攻ができれば速攻、できなかったらしっかりポゼッションして攻撃するというコンセプトで試合に臨んでいたように思われる。しかし FW はニアサイドに寄るばかりであったし、MF も逆サイドへの展開の意識があまりに低かった。簡単に言えば幅のある攻撃ができなかった。ゆえに、後半の終盤にかけての攻撃を例に挙げるなら、左サイドで細かくパスを回して攻めているようだが、行き詰って中央に折り返したボールを MF がまたニアサイド（左サイド）に運んでしまったり、FW も左サイドでのボールポゼッションに参加していてゴール前でシュートを狙う選手がいなかったり、といったシーンが連続

した。

さて、このことは、逆サイドを使う意識（判断力）が欠如していたり、相手のワンサイドカットをかいくり逆サイドに展開するだけのスキルがなかったことを示すのだろうか。私見では答えは否である。いやもちろんそれらも理由の一つであるが、羽黒高校以外のチームがスパンスパンと素晴らしいキックを次々に見せるのに出くわすと、順番は逆のように思えてくる。すなわち、蹴りたいけど蹴れないのではなく（逆サイドに展開したいけどそうさせてもらえないのではなく）、蹴れないから蹴りたいと思わないのではないが（逆サイドに展開するだけのロングキックの技術がないからそもそもそのようなプレーが選択肢に入っていないし、受け手側もアウトサイドに張ることをしないのではないが）、近年、攻撃において重要なことは幅と厚み（深み）と言われることがあるが、山形のレベルで、アウトサイドの選手がしっかりと幅を取ったポジション取りを行い、その選手をしっかりと使って、成立するサッカーに出くわしたことがないと言い切るのは、厳しすぎるだろうか。

こう考えると、ことは2種での頑張りだけでは済まない問題のように思われる。遅くとも3種の段階で、精度の高いロングキックを奨励する文化を持つようにしていかないと、山形の選手のキックに対する意識改革は行われ得ないだろう。大宮の地で、田川地区の地区理事と山形 No.1 チームの応援をして、（劣勢、敗戦で）悔しい歯がゆい気持ちにさせられながら痛切に感じたのは、以下のことであった。山形の選手に足りないのは、一にも二にもキックの技術である。